

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 十 八 卷

アダム・スミス誕生二百周年記念號

目 録

スミスの肖像・筆蹟・國富論初版扉・記念會寫眞

スミスの生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・經濟學博士 本庄榮治郎

道徳的價值判斷に關するスミスの思想・・・・・・・・・・・・・法學士 恒藤 恭

富國論の研究方法来に就きて・・・・・・・・・・・・・法學博士 財部 靜治

スミスとコンデアックとの價值論・・・・・・・・・・・・・法學博士 田島 錦治

スミスの所謂「眞實の價格」について・・・・・・・・・・・・・法學博士 河上 肇

スミスの價格論と分配論・・・・・・・・・・・・・經濟學士 谷口 吉彦

スミスの自然主義觀と自由政策の見地・・・・・・・・・・・・・法學博士 河田 嗣郎

スミスの自由放任論の特徴・・・・・・・・・・・・・經濟學士 堀 經 夫

スミスの自由貿易觀・・・・・・・・・・・・・法學士 作田 莊一

スミスの對植民地策・・・・・・・・・・・・・法學博士 山本美越乃

スミスの租稅原則・・・・・・・・・・・・・法學博士 神戸 正雄

スミスの公債論・・・・・・・・・・・・・法學博士 小川郷太郎

スミスと浪漫派經濟學・・・・・・・・・・・・・法學士 山口正太郎

スミスの名其生涯及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書・・・・・・・・・・・・・商學士 武藤 長藏

書 目

記事 スミス關係書目（細目裏面を見よ）・・・・・・・・・・・・・經濟學博士 本庄榮治郎

經濟論叢

第十八卷 第一號
(通卷百〇三號)
大正十三年一月發行

アダム・スミス生誕二百年記念號

論

叢

スミスの生涯

本庄榮治郎

目次

一 緒言

二 スミスの両親

三 小學校時代

四 スミスとカークリディ

五 グラムズウィグ大學生時代

六 牛津大學生時代

七 マンチェスター大學講師時代

八 グラスゴウ大學教授時代

論叢

スミスの生涯

九 大陸旅行時代

一〇 「國富論」の出版

一一 晩年

一二 結言

一 緒言

かのダーウイン(Charles Darwin)が近世進化思想の鼻祖たると同じく、アダム・スミス(Adam Smith)は近世經濟學の基礎を確立せしものであり、彼の名著 *Wealth of Nations* の初版が一七七六年に出版さるる迄は、今日の所謂經濟學なるものは、未だ成立し居らざりしものであつた。¹⁾ この近世經濟學の鼻祖たるスミスは、恰も二百年以前の一七二三年に生れたものであり、我國の年號では享保八年に當つて居る。我國ではこの年に「價原」で有名な三浦梅園が八月二日に豐後の富永村(現在の太分縣東國東郡西武藏村)に生れており、岡山藩の儒官たりし井上四明(經濟十二論の著あり)も亦此年に生れて居る。スミスの生れたのは、同年の六月五日(我國では享保八年五月三日)で、スコットランドのファイフ州なるカアコウデー(Kirkcaldy)で呱呱の聲を擧げたのであつた。

二 スミスの両親

彼れの父についてはあまり多く知られて居ないが、その名を同じくアダムと呼び、アバーデー

1) The Economist, June. 9, 1923.

ン (Aberdeen) の人であつて、蘇格蘭軍法會議理事、蘇格蘭事務大臣ルードン卿の祕書官、カークウデュー税關吏等の公職に在つたことから見れば、相當有力なる人であつたことは明かである。彼の母はストラスエンリー州の大地主ジョン・ダグラス (John Douglas) の女マーガレット (Margaret) であつて、スミスは實にこの間に生れた一人息子であつた。然しスミスの生れし少くとも約二ヶ月以前に、既に父は此世を去つて居つたことは 一七二三年四月二十四日の日付のある彼の葬儀費の受取證によつて明かである。即ちスミスの生れたときから、母はスミスにとつて一人の親であり、スミスはたゞ一人の子であつたのであつて、母はあまやかせ過ぎる程にスミスを可愛がり、掌中の珠として、その手一つで育て上げたのであるが、スミスも亦常に孝養を盡し、後年大に其名を擧げた後でも心を盡して母に仕へしことは幼時と異らず、親は子のために、子は母のために生くるの有様であつて、スミスは終生娶らず、六十年の長き間、母のために盡して其限りなき慈愛に報ひたのであつた。

三 小學校時代

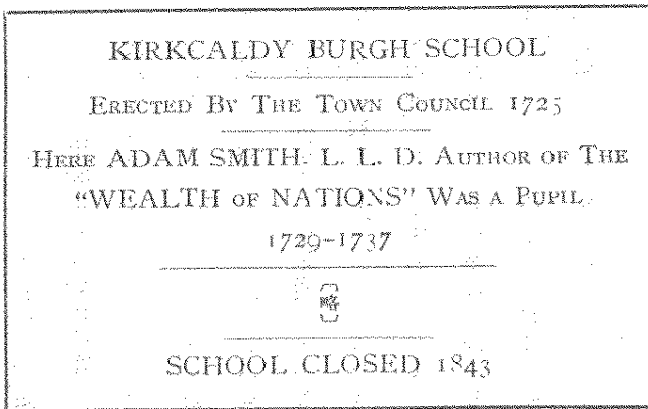
スミスは元來蒲柳の質であつて、幼時に於てすら時々放心の状態となり、又獨語をいふ風があつたが、この性癖は終生癒らなかつた。四歳位のときリヴァン河畔のストラスモンサットの祖父の

2) Prof. Cunningham の所有にかゝり Rae, Life of Adam Smith, p. 3 脚註にその全文を載す。

家へ行つたとき、スミスは偶々其處を通りかゝつた一群の浮浪者のために凌はれ、暫く行方が不明であつたが、間もなく救はれて、暖き母の膝下に歸ることが出来たのであるが、若し此時スミスの行方が知れずに終つたならば、後年における彼の近世經濟學の建設といふ様なことも果して

どうなつて居たであらうか。かく考へれば、この一つの出来事——見方によつては極めて小さい出来事——も言ひ漏らすことこの出来ぬ重大なる出来事のやうにも考へられる。

生來病身であつたスミスも、歳を重ねるに従つて次第に丈夫となり、やがてカアコウデীর小學校(the Burgh School)に入つて、こゝで最初の教育を受けることとなつた。この學校は、その當時スコットランドの小學校中で、最良の學校として數へらるるものの一つであつた。校長はダビッド・ミラー(David Miller)で、校長の名ありし人である。從來スミスがカアコウデীর小學校に入學した年月は明かでなく、たゞスミスが教科書に用ゐたユートロピウスの羅馬史要が今に残つており、それに一七三三年五月四日の日附があるので、ス



1) Prof. Cunningham の所蔵にかゝる。但 Fifeshire Advertiser, June 2, 1923 に
よれば目下 Kirkcaldy のスミス博物館に出陳されて居る。

ミスが羅典語を始めたのが一七三三年頃で、従つてその前に入學して居たらうと推測されておつた次第であるが、先般の記念會に出陳された、同校の寫眞を見るに、その門の處に掲けられてゐる記念標の如きものには、上記の如くに記してある。若し之が眞實であるとすれば、スミス入學の年も明かであり、一七二九年から一七三七年まで、即ち六歳頃から十四歳まで同校に居たこととなる。スミスの學校での成績は頗る優秀であつて、彼は旺盛なる讀書慾と強大なる記憶力とを有し、常に人々の注意を惹いておつた。

四 スミスとカアコウデール

カアコウデールは當時人口約千五百を有する一小都會であつたが、エチンバラより北方約十二哩に當り、海岸に位せしため、バルチック海方面への運漕貿易も行はれ、従つて密輸入に關する色々の出來事などを知れる税關吏もあつた。觀察眼の鋭かつたスミスのことであるから、これ等のことも彼れの思想の上に何等かの影響を與へて居たに違いない。また一二ヶ所の製釘所もあつた。スミスは子供ながらも、この工場を見に行くことが好きであつたようで、彼れの分勞に關する最初の概念は此處で得たものであるといはれてゐるが、兎に角スミスが分勞のことを説明する場合に、ピン製造のことを例に採つたのは、蓋、ピンとか釘とかを造ることが、彼れに見慣れて

2) 在東京御木本隆三氏撮影將來の寫眞

1) Campbell, Journey from Edinburgh through North Britain, 1802, II, p. 49.

居たのであらう。また「國富論」第一卷第四章にはスコットランドの或る村では往々にして、釘工が其勞賃を錢の代りに、釘で受取り、その釘をペン屋や酒場などへ持つて行つて、貨幣同様に、物を買ふに用ゐると書いてあるが、これも恐らくはカアコウデールで知つたことであらう。彼は後年にも屢々カアコウデールに居たから、卿里のことは、彼れ思想にも影響を及ぼせることが少くはないであらうと考へられる。

五 グラスコウ大學生時代

スミスは一七三七年に(十四歳のとき)カアコウデールの學校を退いて、新學年の始まる九月にグラスゴウ大學に入り、一七四〇年の春まで此處に在學した當時グラスゴウ大學には非常に有名な教授が三人あつて、それ等の人々の教を受くるために、學生は千里を遠しとせすして笈を負ふてグラスゴウに集つたものであつた。その三人といふのは希臘語のダンロップ教授 (Alexander Dunlop) 數學のシムソン教授 (Robert Simson) 哲學のハッチソン教授 (Francis Hutcheson) であつて、就中有名なのはハッチソン教授その人であつた。スミスも亦在學三年間に命名ある此等三教授の講述に列し、希臘語についても、數學についても多少とも得る處のあつたことは勿論であるが、最も偉大なる且終生忘るゝを得ざる感化を受けたものは、實にハッチソン教授その人であつた。こ

2) "Wealth of Nations," Cannan's edition, vol. I, p. 25.

のことはスミスが約半世紀の後、母校即ちグラスゴウ大學に於て總長の職に就きし際『決して忘れてはならぬハッチソン教授』(The never-to-be forgotten Hutcheson)を追懷したことによつても明かである。

スミスはヒューム(Hume)の思想を受け入れた所もあり、ケネー(Kennay)の影響を受けた所もあると考へられてゐるが、若しスミスが誰れかの門人であつたかと問ふ人があるならば、彼れはハッチソンの門人であつたと答へ得る程に、ハッチソンの思想は、スミスの思想の根柢を造り、深大なる影響を與へたものであつた。

(註)ハッチソン教授はグラスゴウに於てラテン語で講義することを能め、英語を用ゐた最初の人であつて、別にノートも違らず、自由奔放的に活氣のある講義をした。彼れは極めて雄辯であつたばかりでなく、その思想が頗る清新で發達した處があり、多くの創見に満ち、自由の氣風に富んで居た。従つて青年の思想に非常なる衝動を與へたものであつて、學内に於ては常に青年の信仰の中心となつてゐたが、學外の古い腦の連中からは、舊信念に對する一の破壊者として、即ち所謂新人("new light")として異端の如くに攻撃され、遂に長くグラスゴウに留まるに至らなかつたといふことである。かの「最大多數の最大幸福」(The greatest happiness of the greatest number)の思想は既に早くハッチソンの唱へた所であり、スミスの樂天的、自由的思想もハッチソンに負ふ所が少くなかつたものの如くに考へられる。ハッチソンの名は經濟學史上では、あまり知られて居ないやうであるが、彼れは經濟學に就いても、後半スミスの試みし如くに組織的な講義をしたことがあつた。彼の自然法學(natural jurisprudence)の講義中の一部には、價值(value)、利子(interest)、通貨(currency)等の理論を散見する。彼れ其當時の通説であつた貨幣に關するマリーガンチリスト的の謬想を有せず、價值に就ては使用價值及び交換價值に關するスミスの説を窺ふが如きものがある。勞働を以て富の一大源泉であり、且價值の眞の尺度であるとの觀念を有

し、各人は公共の利益に反せず他人の身體及び財産に損害を加へざる限り、自己の欲する所に従つて、自己の爲めに行動するの自然権を有するものとしてゐる。かのスミスの名と共に離る可らざる關係を有する産業自由の學説は勿論、其他の重要な論點の一部を成す自由、勞働、價值等に關する意見についても、既にハッチソン教授の道破せし所の題目であつた。

當時スミスは僅かに十六歳の少年であつたけれどもハッチソン教授の激勵的指導の下に、彼れの思想は非常なる鍛練を経て、獨自の思想を造り上げむとする迄に至つた。ハッチソンの外、スミスに影響を與へた者は、ヒュームであるが、スミスをヒュームに紹介したのは、實にハッチソンである。といふのは、一七四〇年三月四日付でヒュームからハッチソンに宛てた手紙があり、その手紙の内にあらはれてゐる「スミス氏」(Mr. Smith)と記されてゐる者が、このアダム・スミスであるならば、スミスは、既に其當時出版されたヒュームの「人性論」(Treatise of Human Nature)の抄録本を書き上げたといふ事實があるからである。この抄録本は、公表するために、ある雜誌へ送らるべきものであつたが、ヒュームはこのことを知つて喜ぶこと一方ならず、この少年著者たるスミスに自著「人性論」の一部を贈つたといふことである。スミスとヒュームとの關係は、既にこのときより萌芽を發せしものと見て差支ないであらう。

六 牛津大學生時代

スミスは一七四〇年の六月、蘇格蘭を去つて、スネル基金(Snell exhibitions)の受費生として

牛津大學のペーリオル・カレッヂ (Palliol College) に入ることとなり、全行程を馬に乗つて牛津へと向つたのであるが、彼れは英蘭と蘇格蘭との境界を通過せし瞬間より、英蘭の豊饒にして農業の進歩せること蘇格蘭の比に非ることを痛切に感じた。而して家畜類の如きに就ても同様で、英蘭のよく肥えて油ぎつた牡牛に比べれば蘇格蘭の方は極めて貧弱なものであつた。このことに就ては、彼れが牛津へ着いたその日に、思ひ深き出来事が起つた。といふのは、彼れがペーリオル・カレッヂの食卓に着きし第一日に、食卓に向つて迷想に耽り、つい食事をするのを忘れて居つたが、其時給仕學生 (Sevition) は彼れを呼び覺まして、『蘇國にては今汝の前に置かれし如き見事なる肉は、決して見る事が出来ないものであるから、早く食つた方がいゝだらう』と云つたといふことである。Monthly Review の記者のいふ所によれば、スミスは自己の食卓に大肉片 (joint) の現はるゝ毎に、好んで此物語をしたといふことである。

スミスは七月の七日に入學を許可された。入學簿に彼れは Adamus Smith, e Coll. Ball, Cant. Fil. Jul. 7 mo. 1740. と書いて居るが、その書き振りは如何にも小學生らしい正しい書體で書き付けられて居る。——この書體は終生變はることのなかりしものである。スミスは牛津在學の六年間に、一度も歸省することなく、絶えず牛津に留つたのであるが、年額四十鎊を受くる給費生としては、當時巨費を要せし牛津蘇格蘭間の往復の如きは、到底思ひもよらぬことであつた。スミ

1) Thorold Rogers's edition of "the Wealth of Nations," I, p. VII

スはその受くる所の四十磅の内、約三十磅は食費に充てなければならず、束修などに納むる所のものを除けば残る所は五磅程であり、これだけで他の必要品を辨することは頗る困難であつた。一七四四年に出版されたサルモンの著書²⁾によれば、當時牛津大學生の生活費は、最少限度で年額三十二磅を要し、私費生 (Commoner) の中には六十磅以下で済ます者は極めて少なかつたといふことである。

牛津におけるスミスの生活は、決して幸福なるものではなかつた。一體ベリオール・カレッツに於ける蘇國の學生は常に繼子扱をされて居たが、スミスは此間に於て痼疾に悩みしのみならず、彼れがヒュームの「人性論」を讀んで居たために、ひどく譴責され、この不都合な (objectionable) 書物も取り上げられたといふ事件をも惹き起した。蓋、當時牛津はグラスゴウと反對に、舊思想で固められてゐたからである。三十年の後「國富論」に於てスミスが當時の大學制度について論じ、閉鎖的學問を駁したことや、また英蘭と蘇蘭とに於ける労働者の状態を仔細に比較したことなどは、何れも當時におけるスミス自身の觀察に基いた所のものである。³⁾

スミスは牛津では正規の課程を修めず美文學や倫理政治學等に時間を費し、居ること七年、一七四六年秋郷里カーコウディに歸り、一七四八年秋まで滿二年間、好む所の研究に耽りつゝ、母と共に過したのであつた。

2) Salmon, Present State of the Universities.

3) The Wealth of Nations, Cannan's ed. vol. II. p. 249 seq. vol. I. pp. 75-80

七 エヂンバラ大學講師時代

彼れは始め英蘭教會の牧師たらしめんとして牛津に送られたのであつたが、牧師の職は彼の趣味に合せず、友人の忠告も斥けてスコットランドに歸り、研究に耽つた次第であるが、更にエヂンバラを振出しとして大學の教職に就くこととなり、彼れの光輝ある後半生は、こゝにその序幕を開いたのである。即ち一七四八年來、彼はケームス卿の勸奨に由り、エヂンバラ大學に於て修辭學、美文學を講じ、一七五〇年より五年に亘る學期には經濟學に關する講義をもなし、商業自由の學說を主張したといふことであるから、經濟學については、早くから興味を持つて居たものであらう。これ等の講義は一も出版されて居ないが、前者については、約十年の後、同じく修辭學及び美文學を講ぜしグラムの講義「一七八三年出版」が、スミスの思想を借用せること少からざるを以て、これによつてスミスの講義の内容は窺ふことが出来る。このエヂンバラに於ける約三ヶ年の歲月の間に、彼はヘミルトンの詩集を出版し、ヒュームとの交游を得たるのみならず、更に學界に雄飛するの素地を作り得しものであつた。

八 グラスゴウ大學教授時代

スミスはエヂンバラにおける講義の好評なりしたため、一七五一年一月グラスゴウ大學論理學講

座擔任のため招聘せられたが、其後精神哲學講座擔任教授となり、年額約百七十磅の所得の外に、大學構内に住宅を與へられ、母と従妹ダグラス嬢 (Jane Douglas) と共に住み、グラスゴウ時代の十三年間は、彼の最も幸福なる時代であつたと稱せられて居る。

當時のスミスの講義は後年出版された「道徳情操論」や、「國富論」並に一八九六年キアナン教授の編纂せる「講義録」(Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow) 等によつて略々明かになつて居るが、當時親しくスミスの講義に列したミラー (John Miller 後年グラスゴウ大學の法律學教授となる人) のいふ所によれば、彼れの講義は次の四部より成つて居る。即ち

第一部。自然神學 (Natural Theology)

第二部。狹義の倫理學——主として後半「道徳情操論」にて發表せる學說より成る (Ethics)

第三部。道徳中、正義 (Justice) に關する部分

第四部。國富、國力、及び國家の繁榮増進を目的とし、正義 (Justice) の原則に據りずして、便宜 (Expediency) の原則に基ける政治的規定 (Political regulation) を研究し、此見解の下に商業財政及び宗教上、軍事上の設備に關する政治的諸制度を考究せるもの——この第四部に就きしものは、彼れが後年發表した「國富論」の要旨を包含して居る。

ミラーのいふ所によればスミスの講義の態度は溫雅 (graceful) を稱することは出来なかつたが、卒直明晰 (plain) であり、少しも氣取らず (unaffected) 學生の喜び聽く所となつた。初めは

幾分口籠る様に講義し始めるが、油が乗つてくると流暢に熱烈に説き進めた。

スミスの講義を聽ける學生の中に平凡であるが、然し表情的な容貌をなせる一學生は、常に、柱の前に座を占めて居たが、彼れが前方に乗り出して熱心に耳を傾けて居つたときは、スミスの講義が、全學生の注意を惹き傾聽せる場合であり、若し彼れが後方に凭れて不注意の態度をなせるときは、その説く所が、學生に受けて居ないことを示すもので、其問題若くは説き方を變更せねばならぬことを示すものであつた、といふ一挿話も傳はつて居る。¹⁾

スミスはプロフェッサーとして最も適任であり、彼れの名聲は大に高まり、スミスの講義を聽んがために、遠きより笈を負ふて來る學生も少からず、スミスの受持てる學問はグラスゴウにて大流行となり、スミスの意見は諸俱樂部文學會等に於ける討議の主なる題目となつた。彼の發音や話し振る態度等些細なることすちも、屢々模倣の對象となるに至つたといふことである。

一方に於てスミスは着々として其倫理學說の完成に力め、一七五九年にかの「道徳情操論」(The Theory of Moral Sentiments)を公にするに至つた(本書はその六版を一七九〇年に出版した。當時スミスは致命症で苦んでゐたにもかゝらず、注意して増補され、表題も長く書き加へられた)。一七六二年にグラスゴウ大學は彼に贈るに法學博士(Doctor of Laws)の學位を以てしたが、當時スミスの名は年と共に高く、漆喰製の胸像は書肆の店頭を飾つておつたといふことである。

1) Sinclair, Sketches of Old Times and Distant Places. 1875. p. 9.

スミスは單に學問的方面のみならず實務の方面に於ても手腕を有せしことは、レーの研究によつて明かである。彼れは十三ヶ年間の在職中、他の教授の孰れよりも、校務に盡瘁する所多く、會計、舍監、市に對する交渉、議會に提出する議案に關する交渉、學部長、其他の委員等に擧げられた。

グラスゴウ大學では、スミスの就任に先立つ數年前、化學實驗所を建設したが、一七五六年に當時僅かに二十歳の青年であつた。ジェームス・ワット (James Watt) は倫敦を去つてグラスゴウに來たが、同市の鐵工組合ギルドが市内に製作所を開設することを許さざりしため、グラスゴウ大學では、校内に製作場及び賣場を作り、ワットを同大學數器械製造者たらしめたのであるが、このことについても、スミスの盡力による所が少くなつた。スミスは屢々ワットの工場を訪ひ、兩人はやがて親交を結ぶに至つた。其後一八〇九年ワットが八十三歳のとき、彼れが新に發明した彫刻機械で以て、先づ第一に作り上げたものの一は、實に象牙製のスミスの像であつた。²⁾

スミスが初め學生としてグラスゴウに在りしときは、グラスゴウは猶ほ貧弱な一小市であつたが、彼れが教授として再び同市に來りしときは、既に商工業隆興の氣運に向ひつゝあつたときであつて、スミスはグラスゴウ市について學び得た處も少くはなかつた。當時クライド (Clyde) 最大の商人の一人にして又市長たりしコクレーン (Andrew Cochran) は貿易の本質及び原則を研

2) Muirhead, Life of Watt. 1858. p. 470

究する目的を以て一七四〇年代に一の俱樂部を作つたが、スミスもその會員の一人であつた。スミスはまたグラスゴウ學會やシムソン俱樂部にも關係しており、又屢グラスゴウの商工業者と接觸してその實際上の智識を豊富にしたと傳へられて居るが、「國富論」全卷を通じて隨處に引用せらるる饒多なる實例は此間に得た處のものが少くない。若しスミスにして永く牛津に留り、少壯時代をグラスゴウで過すことなかりしならむには、彼は決して斯くの如く拔群の經濟學者たる能はざりしなる可しと稱せらるゝ程、グラスゴウに在つて得る所は甚だ多きものがあつた次第である。

尙當時創刊されし「エディンバラ評論」に寄書して、ジョンソン辭典の評論（一五七年七月刊、初號）編輯者に與ふる書（一七五六年一月刊、二號）等を掲げたのも、グラスゴウ時代のことである。又屢休暇を利用してエディンバラを訪ひ、ヒュートムと永遠の親交を結んだ。

九 大陸旅行時代

然しスミスもグラスゴウを去らねばならぬ時期が來た。それは一七六三年末青年貴族のバックルー公爵（Duke of Buccleugh）に隨行して、大陸旅行をなすべき招請を受けたからであつた。スミスは旅費として年三百磅尙終生年金としし三百磅を受くる約束であつたが、彼れは喜んでこれに

應じ、一七六四年二月海峡を越えて大陸に渡り、やがてグラスゴウ大學教授の職を辭した。

スミスはグラスゴウに於ける最後の講義を終へた後、ボケットから紙包にされた學生の束脩を取出して學生の名を呼んで、之を返さうとした。處が學生はこれを受けず、『これ迄に受けた教訓と歡びとは嘗てそれに報ひ、又は償ふことの出來たより以上のものである』と叫んだが。スミスも亦自分の志を曲げず、感謝の意を表した後『私は自分が正しいと思ひ、當然であると考ふることを完成しないでは満足が出來ない。諸君はこの満足を拒絶してはならぬ。否諸君は誓つて拒まないでしやう』といひ、青年の上着を捉へてボケットに金を投げ込み、彼れから押し離して仕舞つた。之を見た他の學生も最早如何ともする能はず、スミスのなすまゝに委せたといふことである。

スミス一行は二月十三日巴里に着き、此處に數日を過して後、ツールーズ (Toulouse) に向ひ、そこに留ること一年半 此處は大學や大僧正管區のある地方都市で、社會上學問上の中心たる點に於て、佛蘭西のエデンバラとも稱せらるべき處であるが、ヒュームに送つた手紙によると、スミスの生活は、グラスゴウに於ける生活に比し、愉快ではなく、時間潰しに書物を書き初めたといふことであるが、これが後年の「國富論」をなすべき第一歩であつたことを思へば、決して無意義なる生活ではなかつたのである。

次で南部フランスから瑞西のゼネバを歴遊した後、一七六五年のクリスマスに巴里に至り、滞在約一年、彼れはこの旅行によつて、親しくフランスの産業財政行政等の實狀を視察し、バックル^ル公爵の地位と親友ヒュームの紹介と、并にスミス自身の文名とに依つて佛蘭西の學界、文壇の大家殊にケネー、チュルゴーを始め所謂佛國フジャクラトの諸學者と接觸して大にその影響を受けた。

かくて一行は、一七六六年十一月倫敦へ到着したが、スミスの態度應對振りは、殆んど一變し昔の無骨さは見られなかつたといふことである。翌年の五月カアコウデイーへ歸つて、母及從妹と共に住み、一代の大作「國富論」の著作に没頭した。研究の間には、海岸へ散歩することが嫌みであり、非常に幸福で、安樂で、且満足して生活して居つたことは、ヒュームへの手紙に明らかである。

一〇 「國富論」の出版

かくて六年の後、一七七三年四月漸く脱稿せし原稿を携へてロンドンへ向つた。そして倫敦に於て知名の士と交り、「國富論」の批判を乞ひ、補正された所も少からず、漸く三年の後即一七七六年三月九日 *An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations* なる表題の下に四

折判二冊として世にあらはれた。實にスミスが五十三歳のときであつて、佛國ツールーズで稿を起してから丁度十二年になる。定價は一磅十六志で約一千部印刷された第一版は半歳の間に賣り盡され、第二版は一七七八年に出版されて、多少訂正増補を施され、定價二磅二志であつた。

スミスの經濟學は、抽象的の理論を羅列せるものではない。ウェークフィールド (Wakefield) のいつた通り『彼れは理論を組立つるために、現はれたのではなく、國富の歴史を編まんかために現はれたのである。勿論彼れは原理を論じて居るが、それは大抵は彼れが述ぶる事實を説明せんために用ゐられたもの、如くである』²⁾ スミスの親友、ヒュームは國富論の公刊を見て非常に喜び『此著述は深遠 (depth) と堅實 (Solidity) と鋭敏 (Acuteness) とを備へ、且珍らしき事實を以て十分に説明されてゐる。必ずや最後に一般の注意を惹くべきものである』といへる如く、實に興味深き事實が多く記されてゐる。例へば、

『蘇格蘭の一村では勞働者がパン屋や酒場へ行つて錢の代りに釘で物を買ふ』³⁾

『英國で長靴を履いた最初の人はナリザベス女王だと云はれて居る。女王はそれを西班牙大使から贈られたのである』⁴⁾

『國富論』には日本に關する記事も二三見えて居る。即ち

『日本の銅は歐羅巴交易の物品となつて居る。日本に於ける銅の値段は、歐羅巴に於ける銅價の上に何等かの影響を及ぼすに相違ない』⁵⁾

『日本に於ける金銀の比價は一と八ミの割合である』⁶⁾

1) Hirst, Adam Smith, p. 164.

2) Hirst, *ibid.* p. 166

3) *Wealth of Nation*, Cannan's ed. vol. I, p. 25

4) *ibid.* vol. I, p. 245

5) *ibid.* vol. I, p. 168.

6) *ibid.* p. 211.

『支那、後印度、日本諸國はメキシコ、ペルーと比較して一層豊富なる金銀鑛を有せざるも、其他の點に於ては、この二國よりも遙かに富み、遙かに開け、且つ技術製造に於ては一層進んで居つた。』

『パタゴニアは後印度より支那日本に至る交通の要路に當り、且つその中間に在り、支那日本トシテ其他の船は屢回港に碇泊せざるを見る。』⁷⁾

『支那は日本との貿易を除くの外は自國の船舶に乘し、自ら進んで外國貿易を營むこと殆んどなく、外國船の出入を許せる港も一二港に過ぎない。従つて支那人は日本人に倣ふの外他國の發達に學びて自國を一層進歩せむる機會を有せざる如くである。』⁸⁾

これ等の事實が、日本の史實から見て、それだけの確實さを有するかを研究することは、興味ある問題であるが、それは他日に譲つて、茲にはたゞ『國富論』には以上の如き記事があり、それによつてスミスと日本とが『國富論』の上で結び付けられて居ることを注意するだけに止めておく。

一一 晩 年

かくて二年の後一七七八年スミスはスコトランド税關委員に擧げられ、老齡なる母及び従妹と共にエジンバラに移つたが、當時税關委員として年俸五百鎊鹽稅行政官として一百鎊、バツクル公爵家より年金二百鎊、合計年額九百鎊を受けて裕福なる生活をなして居た。時代の相違はあるが、父の收入が僅かに年額四十鎊であつたのに比して非常なる違いである。

一七八七年母校グラスゴウ大學總長に選ばれ、三年の後永眠した。死する十數日前、發表され

7) ibid, p. 414

8) ibid, vol. II, p. 134

9) ibid, p. 178.

ずに残つて居た原稿は、不満足のものとして、死後悉く焼き棄てんことをその友人に依頼したが、それだけでは氣が濟まず、數日の後、更に友人を促して、直ちに自己の面前にて、之れを火中に投せしめ、漸く安心することが出来たと傳へられて居る。スミスの眞面目な慎重な態度は、この點に於ても明かに認められる。

スミスは元來弱い方であつたが、一七八四年に母を失ひ、一七八八年にダグラス嬢を失ひ、悲嘆に暮れて、健康は大に害せられ、かくて二年の後、即ち一七九〇年七月十七日鴈の慢性疾患のため (by a chronic obstruction of the bowels) エヂンバラに永眠した。年を享けること六十有七。同地のカノンゲートの教會に葬る。「國富論」出でてより十五年の後であつて、その時には「國富論」は既に第五版を出し、歐洲各國語にも翻譯され、下院に於ても彼の説は屢引用せられ、實際界に於ても「國富論」によつて大なる變化を與へたことを、スミス自らも多少見ることが出来て瞑目した次第であつた。

一一 結 言

云ふ迄もなく、スミス以前にも經濟學はあつた。スミスの説く所は悉く先人未發の眞理であるといふわけでは決してない。其本源に溯ればハッチソン教授あり、ヒュームあり、チユルゾーあ

り、ケネーもある。然し一度これ等先人の所説が、スミスの偉大な頭腦を通過して後に出来て来たものは、一科の學問として確實なる基礎の上に立てられた、近世の經濟學そのものであつた。スミスが嘗て論究した諸問題は、分業論にしても、自由貿易論にしても、租税の原則にしても、今日尙常に論究されつゝある問題である。二百年前に生れたスミスは尙今日「國富論」によつて、我々經濟學にたづさはれる者に、何等かを教へつゝある。スミスこそ眞に不朽の名著を残し永遠に生けるものといはなければならぬ。

(附言) スミスが近世經濟學の父として、經濟學史上極めて重要な地位を占めてゐることや、スミスの著述の計畫が決して「道徳情操論」や「國富論」のみに終りしに非ること、「國富論」をそれ以前の經濟に關する諸義との差異、「國富論」の各種の版本、スミスとフイジチクロットの學說との關係、「國富論」の實際界に及ぶ影響等も詳述すべき筈であるけれども、既に豫定の頁數を盡したのみならず、元來スミスの傳記にしても、その著書のことについても、或は學史上の地位又はスミスの影響の如きことも、最早屢々我國に於ても論じ盡されたことであるから、私はたゞスミスの略傳を時代を追うて簡單に述ぶるだけに止めておいた。卷末に附載された書目を見らるゝならば、其等の論著や參考書は自ら明かであらう。傳記の中ではレーの「スミス傳」が最も眞實とされて居る。私も大體それによつた。特に引用書を示してない事實はレーに據つたものと考へられたい。尙河上博士の近著「資本主義經濟學の史的發展」の中にもスミスの傳記や著述について詳細明確なる記述のあることを茲に附記しておく。